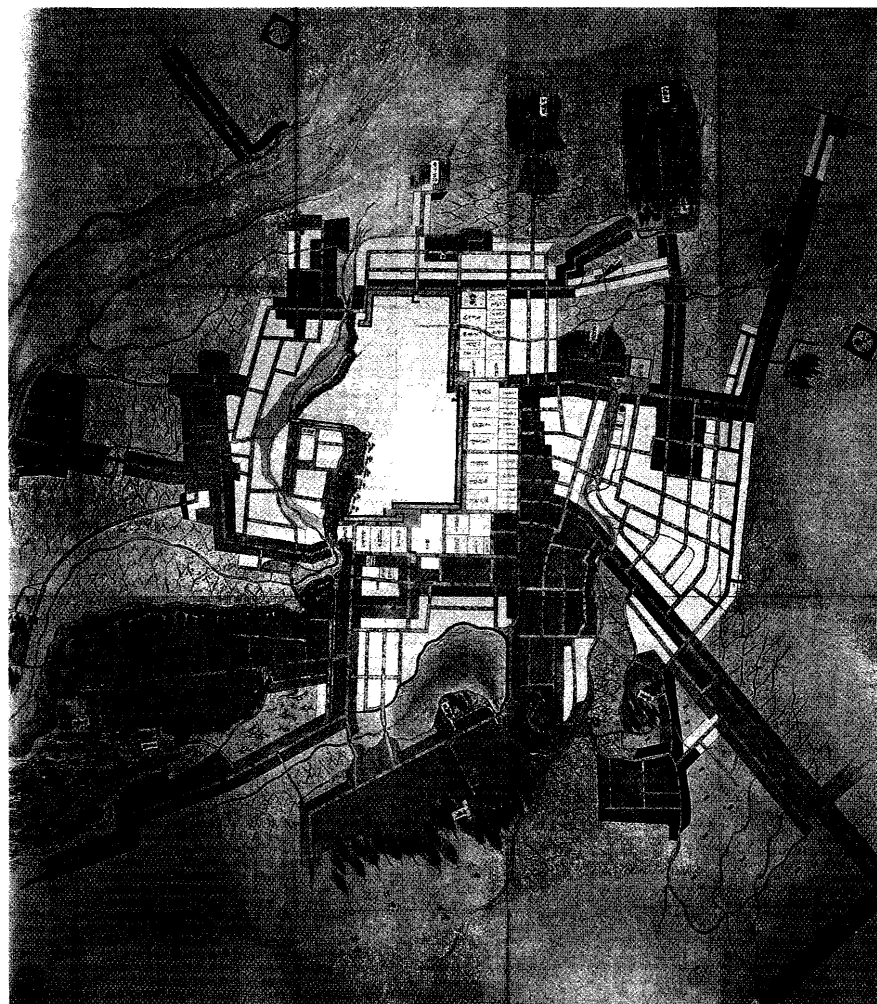


# 後期弘前藩政と民衆

弘前大学大学院教授

はせがわせいいち  
長谷川成一



寛政12年(1800)ころの「弘前分見惣絵図」。弘前藩の寛政改革が失敗に終わり、藩士が在方から弘前城下に帰還し、城下町の景観が元通りになった様子を描いている。武家町は桃色、町人町は橙色(弘前市立図書館蔵)。

## はじめに

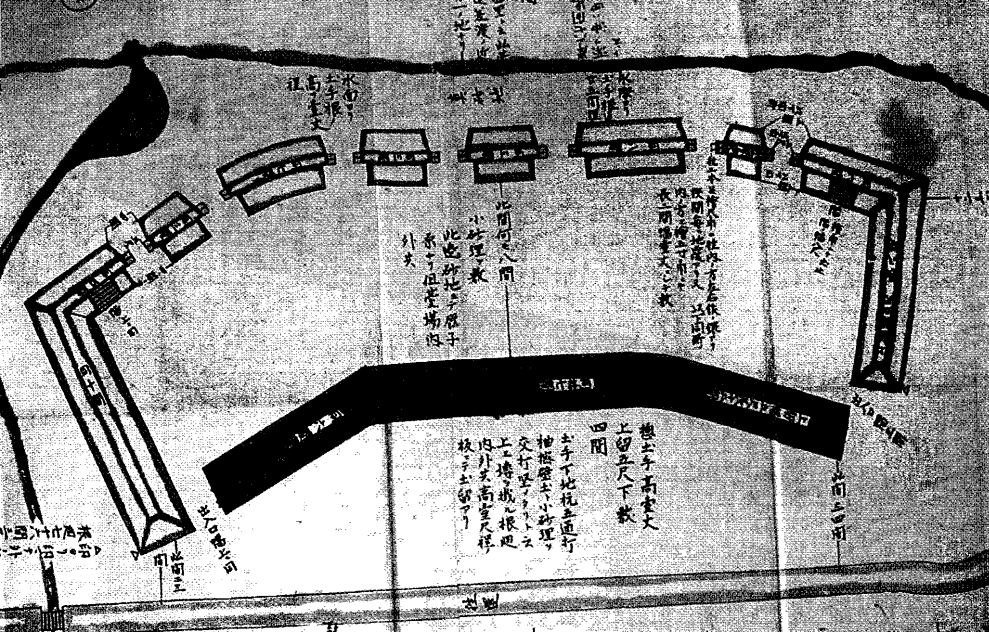
十八世紀後半から十九世紀後半の明治維新に至る、津軽領の約百年間は、巨大災害が断続的に襲った時期と言ってもよからう。「御国御草創以来ノ大地震」(明和三年「一七六六」の大地震)、「御国始てこれなき大火事」(嘉永六年「一八五三」の青森大火)、「前代未聞の大変」(安政六年「一八五九」の青森大火)を代表として、大地震、大火災、大飢饉などに見舞われた。明治元年(一八六八)、青森の豪商瀧屋伊東家の日記「家内年表」には、津軽領が「澆季」(衰えた末世)の様相を呈しているときえ記されている。

それではこのような困難な状況にあった後期弘前藩において、人々はどのように行動し、藩はいかなる対応をしたのであろうか。以下、災害の実態と民衆の動向、天保期藩政の混乱など、後期津軽領の実情を見てゆくことにし

よう。

## 天明三年という年

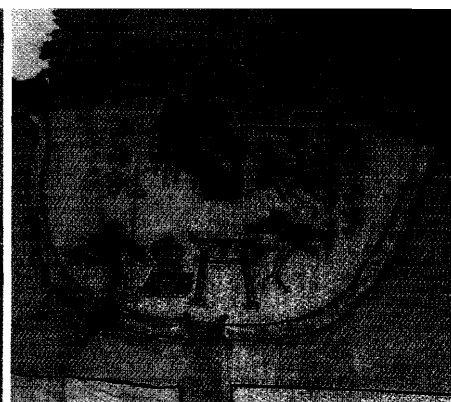
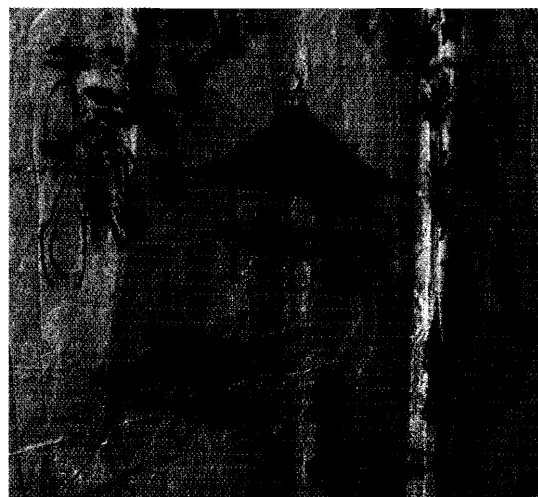
天明三年（一七八三）といえば、読者の方々は、大量の餓死者を出した天明の大飢饉が始まった年として記憶しておられるであらう。



「津軽藩御台場設計絵図」より平館砲台の図：異国船の津軽海峡通過に伴い、嘉永元年（1848）、平館村（現東津軽郡平館村）に西洋流の台場が築かれた。明治2年に撤去（市立函館図書館蔵、筆者撮影）。

う。確かに、津軽領でも他領と同様、元禄八（二六九五）・九年の凶作・飢饉以来の甚大な被害をこうむった、大飢饉の始まった年であったのは間違いない。

しかし、視点を変えたと天明三年という年



「青森町絵図」より「諏訪宮」（上）と「毘沙門堂」。文政9年（1826）に描かれた、近世後期青森町の様子を伝える絵図。諏訪宮は青森町の東端、堤川沿いに、毘沙門堂は町の南端に位置した（弘前市立図書館蔵、筆者撮影）。

は、津軽領で大規模な都市騒擾、つまり青森町で「打ちこわし」が勃発した年でもあった。従来の弘前藩では、かつて経験したことのない民衆の戦いが、領内第二の都市で初めて起こったのである。後期弘前藩政は、青森騒擾と称された右の打ちこわしや、津軽領での義民を生んだ、文化十年（一八一三）の民次郎一揆のような、藩政に対する民衆の異議申し立てとの対決であった。さらに、相次ぐ大災害とそれへの対処、司法・警察権力による、崩壊しつつある領内秩序の立て直し、ロシアの南下による蝦夷地警衛と領内警備の実施（平館など沿岸砲台の設置）など、直面する内憂外患をいかにして克服してゆくか、というのが後期藩政の重大な課題であった。

## 青森騒動と天明の青森大火

鯨ヶ沢湊と並ぶ、津軽領における廻米移出の青森で打ちこわしが起きたのは、天明三年七月のことであった。騒動に参加した人々の主な要求は、青森湊からの廻米停止と延期、廻米の囲い込みによる米価の安定などだった。しかし、騒動は藩の徹底的な弾圧にあつて崩壊し、上方への廻米は強行され、天明の大飢饉の引き金が引かれたのである。

騒動の経過を簡単に追うことにしよう。七

月十日、家屋二百六軒、町奉行所と善知鳥宮を焼失した、青森浜町の大火があり、これが打ちこわしを誘発する契機になったという。

大火の九日後、七月十九日夜、青森町東端の諏訪宮（当時、堤川の西岸に所在）及び南端の毘沙門堂境内（現青森市柳町）にそれぞれ百人ほどの者が集まり、そこから四十〜五十人で連れ立って町中を練り歩き、翌日の毘沙門堂境内におけるデモンストレーションへの惣町挙げての参加を呼びかけた。翌二十日朝、呼びかけどおり三千〜四千人の町人が杉畑（現青森市）と毘沙門堂境内に参集し、参加者は当時の青森町の約半数弱に相当した。

騒動勢のうち、名主会所万屋武兵衛方へ七百〜八百人余が押し寄せ、来年春までの公定値段（銀一匁につき米一升四合）での販売、廻米の停止、米留番所の廃止などを「惣町中一決」の主な要求として訴えた。

そうした中で、寺町の商人嶋屋長兵衛が、近隣の常光寺に米を隠匿しようとした行為が発覚した。騒動勢は、ほかにも米隠匿の行動が横行すると判断し、見せしめのため、嶋屋を打ちこわすことになった。嶋屋は、米不足の際に隠米をする不届き者として家を取り壊され、家財道具・衣類・売り物まで引き裂かれ、鍋・釜まで打ち砕かれたという。その後、一青森一の分限者一の大町横町の辻甚左衛門

家が打ちこわされ、市街中心部の大町・浜町・米町を中心に周辺部の寺町・博労町・安方町の有力商人十軒が打ちこわしの対象となった。

騒動は突発的・偶発的なものではなく、十分な計画と組織・規律に支えられた行動であった。打ちこわしにあたって、騒動勢は、大工や商人の家から手斧などを持ち出し、武装・準備を十分に行ってから決行した。さらに、現場での盗みを厳禁し、違反した者を厳罰に処したり、事前に対象となった店に通告して家内の者を避難させ、死傷者が出ないように統制したという。

騒動の終息後、同年十一月十二日、青森町は再び大火に見舞われた。これは従来の大火とは様相を異にするものであった。大火の六日前の十一月六日、投火と称される放火によって、青森近在の清水村・油川村などで火災が発生していた。下手人はいづれも百姓の子供であった。青森町でも警戒していたところ、十二日の夜に安方町から火災が発生、一千四百四十六軒余が焼亡し、青森町では約九十パーセントの家屋が焼失したのである。火元は安方町の長次郎宅であった。

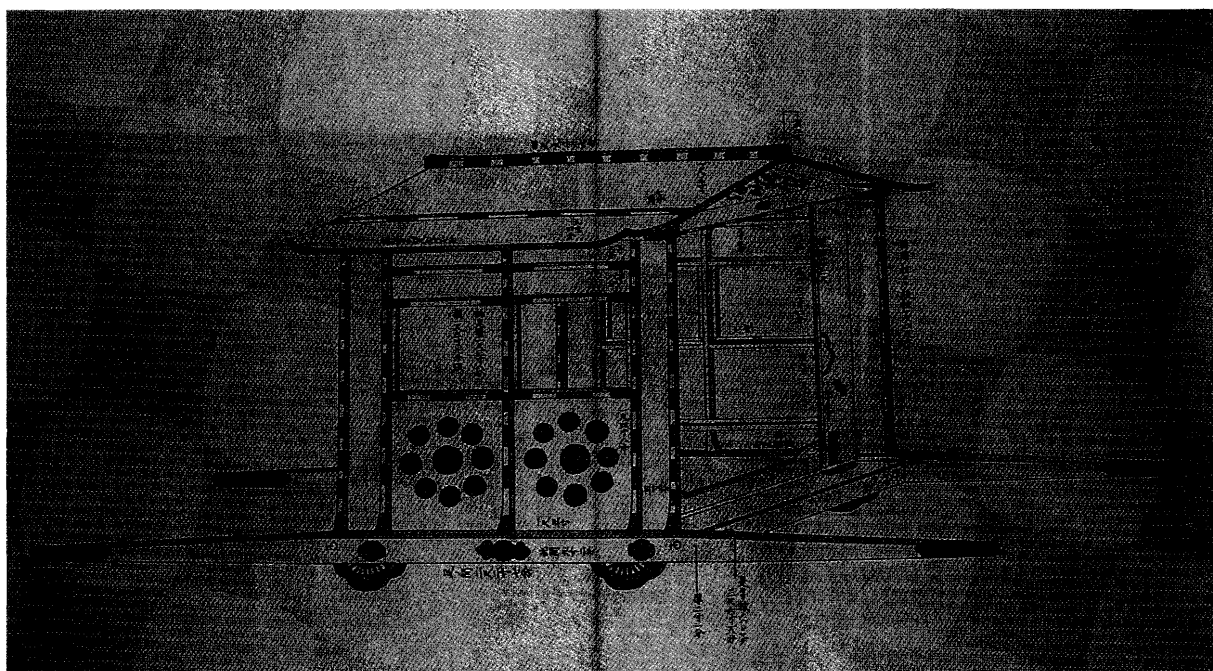
弘前藩では、弘前城下に放火犯が入り込むことを極度に警戒し、青森街道の警備を厳重にした。それにもかかわらず、領内では放火

が頻発し、津軽領における社会不安は極に達した。藩による有効な手だてが講じられぬまま、大火の痛手にうちひしがれた青森町民や領民を待っていたのは、天明の大飢饉による飢餓であった。

## 混迷する天保期の藩政

文政十年（一八二七）の「弘前報」事件（十代藩主津軽信順が、幕府の許可なく江戸城へ轅に乗って登城した事件）で逼塞処分を受けた信順は、その鬱憤を晴らすかのように側室の増衛（江）を寵愛するようになった。江戸日本橋で大店の油屋を営む増衛の父親が、天保三年（一八三二）、柳島の下屋敷（現東京都墨田区）の向かいに広大な屋敷を建設した。信順は、そこへ足繁く通い贅沢な生活にふけたため、巨額な出費は藩庫に打撃を与えた。加えて、天保四年からは凶作が本格化し、藩財政は未曾有の危機に直面した。

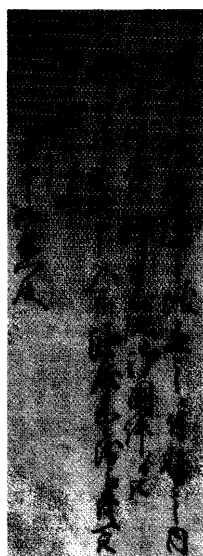
天保三年七月、信順の庇護者であり、隠居の身だった前藩主津軽寧親が他界すると、八月、家老の津軽多膳は信順に二十二力条にわたる非常倹約を提言した。内容は、生産性の低い鉄山・銀山・塩田・牧場などの開発運営の中止、さらに寧親の隠居料一萬石の藩庫への繰り入れ、奥女中や小納戸金（藩主生活費）



「奥車図考附図」より轎の図。本来、轎は上皇・公卿等の遠行用の乗り物。四位・侍従の大名が乗るものであったが、津軽信順は侍従でなかったため、幕府からとがめられた（弘前市立図書館蔵、筆者撮影）。

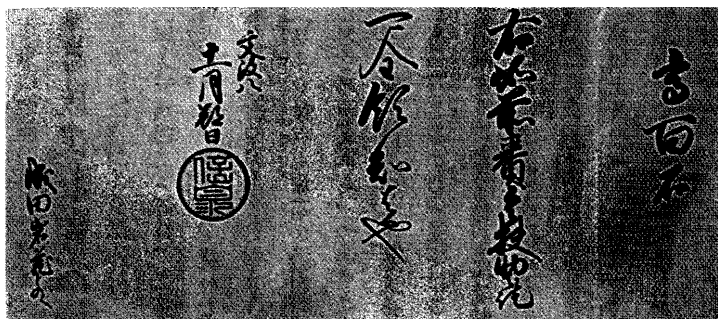


「天保10年津軽多膳誓詞」より多膳の花押と血判。失脚していた津軽多膳が、天保10年（1839）に再び家老職に復帰したときの誓詞。署名・花押の他に血判をして、役務に不正のないことを誓った（弘前市立図書館蔵、筆者撮影）。

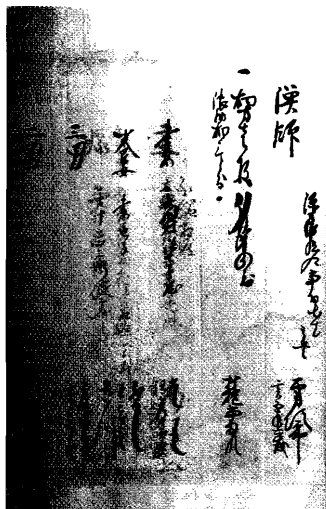
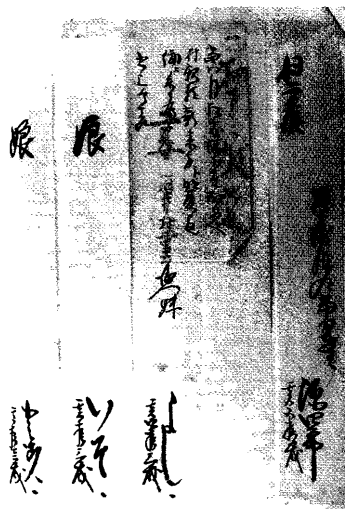


「弘前藩庁日記 江戸日記」天保4年8月15日条より江戸日記に登場する「増江（衛）」：増衛には「故障」があつて、しばらくの期間、国元（津軽）住居を命じるという通達である。文中の油屋は増衛の実家（弘前市立図書館蔵、筆者撮影）。

「天保5年笠原近江誓詞」より近江の花押と血判。笠原近江皆充が、御手廻組頭に就任したときの誓詞。この後、近江は家老職に就くことになる（弘前市立図書館蔵、筆者撮影）。



「津軽信順黒印知行宛行（あてがい）状」。文政8年（1825）、馬廻三番組番頭を勤めていた成田岩蔵に、100石を宛行う藩主信順の黒印を押印した宛行状。成田氏は「八十三騎」の古い家柄（成田裕氏蔵、青森県史編さんグループ写真提供）



文久3年(1863)「浅虫村面改帳」表紙(右)、漁師家族の項(中)と日雇家族の項(左)。面改帳の記載は、家ごとに戸主の家業・年齢、所持田畑の反別、家族名、血縁関係、嫁・婿の場合は実家の所在、家族数の男女別計と旦那寺、家屋数の広さ、所持の牛馬数、船の大きさ・船数など。従来の人別帳とは異なり、より詳細かつ個別・人身的に領民を把握することに目的があった(青森市歴史民俗展示館「稽古館」蔵、青森市史編さん室写真提供)。



「津軽寧親絵像」。絹本着色。縦67×横42.5センチ。作者不詳。寛政改革を施行に移した。文化5年(1808)10万石に昇格。文政4年(1821)寧親を狙う、相馬大作事件が勃発した(報恩寺蔵、弘前市立博物館写真提供)。

の削減など、藩主の私生活にまで及ぶ緊縮策であった。しかも翌四年八月、多膳は信順に詰め寄って、増衛の屋敷の廃棄と彼女の国元送りを承諾させた。

多膳と信順の対立は先鋭化し、主従の亀裂に付け入ったのが笠原近江であった。彼の父の笠原八郎兵衛は、前藩主寧親の代に江戸家老として活躍していたが、天保元年、財政不健全化を理由に失脚し、息子の近江も冷遇された。同四年九月、近江は、江戸から弘前に下ってきた側室の増衛と接触し、奥方との関係を深めた。

同年十月、財政の復旧を議する会議において、多膳派は近江派に敗北し、信順の意向を笠に着た近江派は、多膳派二十七人を一挙に罷免・役替えに処した。翌五年、近江は家老に就任して藩政の中樞を支配した。同年二月、近江は困窮する農民に鉾・鋤一万挺を与え、九月には、家中禄米を三步引きとして財政難の打開を図り、借財を削減しようとした。しかし、天保の大飢饉に対しては有効策を

打ち出すことができず、同七年九月、笠原近江は罷免・謹慎処分となった。

一方、津軽多膳は信順が隠居した同十年、再び家老に就いた。幕府は、家中騒動や財政難を收拾できない信順に対して不信感を抱き、蝦夷地警備遂行は困難と判断して圧力をかけたため、信順排除の運動が拡大し、同年五月、ついに信順は四十歳で隠居を余儀なくされた。嗣子を定めていなかったため、支藩の黒石藩主順徳(後に順承)が、養子として本藩藩主に迎えられた。

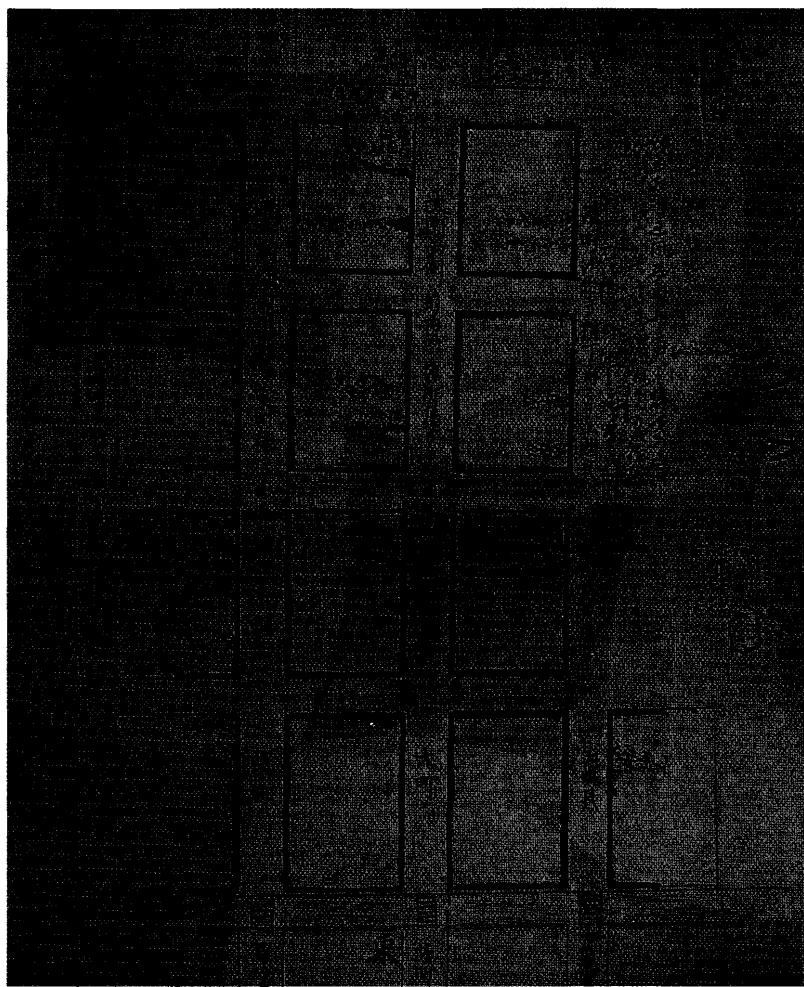
## 移動する民衆と領内治安

天保十三年(一八四二)七月、弘前藩は、他領の諸勸進や六部、遊行者、疑わしい浪人の入領禁止を打ち出し、たとえ知り合いの他領者でも入切手を徴収し用事が済んだら速やかに帰すことなどを定めた。ついで弘化元年(一八四四)十二月には、賈金銀の流通が発覚する事件があったことから、藩ではこれを他領者の仕業と断定し、入領をさらに規制した。この布達では、天保十三年にはなかった「俳諧師」「書画師」などの文人墨客の入領を禁止したうえ、他領出身の奉公人を雇っている藩士は即刻暇を出すこと、奉公人宿も他領者を扱うことを禁止するなどが定められた。

右の状況は、幕末に至って経済活動の広域化とともに広範囲な人口移動が起こりつつあり、それに対して藩側が有効な手だてを講じることが次第にできなくなってきた社会情勢を反映している。このような事態に対して、藩は従来の人別改めとは異なる、面改めなどを実施して領民の掌握を図っており、領内秩序の再建に努めた。しかし領内の治安は不安定で、頻発する犯罪は従来のそれとは異質で

あった。それは、藩領を越えた広域の性質を持つものへと転換しており、変化に対処できない藩内の警察権は著しく弱体化した。

弘前藩は、万延二年（一八六一）二月、無提灯や覆面での往来通行の禁止、八月には、藩士に対する意外の無作法を厳禁する禁令を発した。武士に対する民衆の態度が敵対的な事態に至っていることを反映したもので、身分制の危機すら生じつつあったようだ。



「金木屋日記」より嘉永6年青森大火の図。焼亡した町や船舶が朱で縁取られて、火災の規模がわかるように描かれている。火元は町の箇所に朱丸と「米沢屋百治郎火元」と明記され、この大火により、当時の青森町のメインストリートがほとんど焼失した（弘前市立図書館蔵、青森市史編さん室写真提供）

## おわりに

嘉永六年（一八五三）四月の青森大町大火は、安政六年の「前代未聞の大変」と呼ばれた大火事に匹敵する被害を及ぼした。弘前の有力商人金木屋敬之は、その日記「金木屋日記」に火事について興味深い記事を載せている。大町大火の出火以前に、大火を予言するような噂（いたこ払い・被い）・口寄せによる大町大火の予告）が広まっていたこと、大火後、悪辣な盗人が跳梁したこと、付火（放火）の噂が絶えなかったことなどである。青森の豪商瀧屋が日記に記した領内は、まさに「澆季」の様相を呈していたと言えよう。

しかし、安政の開港に伴って箱館（現函館市）に駐留する外国商人との交易活動は、弘前藩の有力商人たちにとって大きな商機だった。当初警戒していた金木屋も、アメリカ人との商取引に積極的に関わり組み、英語の習得にさえ励んだ様子が見える。瀧屋も、同じ青森の豪商村林家と共に幕府から御用達のお墨付きを得て、箱館における幕府や諸藩、外国公館の必要物資の調達に辣腕をふるった。彼らは「澆季」と嘆きつつも、外国も含め、激変する領内外の社会情勢を乗り切り、したたかに商売の実を上げていったのである。